優勝者の弁

（HI盃優勝者）

当時の想い出

神田道朝

私が三菱海上へ入社したのは大正十五年、HI盃には何回か出場したのでHI盃の楽しい思い出はそれこそ尽きない位い多い。私が、岩崎さんに初めてお眼にかかったのは入社後間もない頃であった。本店見習期間中の一日、東京クラブで初めてテニスのお相手をしたが、その頃の岩崎さんはまだ三十代のお若さでテニスの技倆も大したもので、大学選手でも中級クラスの者では中々勝てなかった位の腕前であられたし私もお相手して見てその巧さに少からず面喰ったことを今でもよく覚えている。岩崎さんのテニスのことは若い人々の間では案外知られていないのではないかと思う。ロンドンカップ御寄贈のことも後になって「成る程」と肯かれた次第。その頃、大淵さん、野村さんも四十になるかならぬかの御年輩で染井のコートで盛んにテニスをされていたが、野村さんの壁のように正確なグラウンドストローク、大淵さんの想像もつかないところから飛んで来るドライブのかかった鉄砲球等々、そのプレー振りは今でも昨日のことの様に強く印象に残っている。入社後半年して神戸支店勤務となったが、当時神戸には銀行に熊谷さん、電機に間、関沢、住友さん、重工に平野さん等がおられ、日曜日には会下山の神戸クラブでよく御一諸にテニスをして愉しく過したものだ。

その頃は岩崎さんも年に一度はきまって関西にも見えられ、その都度、関沢さん、熊谷さんと私がテニスの御相手をし、夜はいつも御馳走になってテニス談議に花を咲かせた。当時のことは今でも懐しい思い出の一つとなっている。その頃、岩崎さんからラケット（ゴールドスター）を一本頂いたが入社早々の私には大変有難かったし、その後色々のトーナメントに出場の都度愛用させていただき幾つかの優勝カップも獲得することが出来た。

丁度その頃―昭和三年か四年だったか―関東で開催されたHI盃に私も関西の代表選手として出場し、幸運にも優勝の栄冠をかち得たが、昔からHI盃の出場選手は何れも強豪揃いで、優勝は難事とされていただけに一度でもHI盃のカップホールダーになり得たことは大変名誉なことだったと光栄に思っている。その夜、間さん、関沢さんから関西側選手一同銀座ですき焼の御馳走になったが、当時のことは特に感銘深く印象に残っている。

HI盃は、現在関東関西対抗戦に更に百才トーナメントを加え、参加人員も年毎に増し益々盛大さを加え懇親機関としての役割も一層大きくなったが、テニスのプレーも兎に角、年に一度お馴染み深い人々と親しく御会い出来ることは何よりの楽しみである。本年のHI盃は秋に関西で開催されるとのことで、今からその日を楽しみにしている。

（優勝　昭和三年）

決勝の思い出

牧野　元

HI盃試合の決勝の思い出を書けとの命令を戴いたので銀行の浅田委員に御伺を立てた処敗けた分は相手が書いて呉れるから勝の分を書け、相当な人で優勝して居ない人も居るのだから遠慮せず堂々と書けとの御託宣が出たので記憶を辿って書くこととしました。

私が航空機会社へ入れて貰ったのは昭和四年で、新入社員ではあるし其の年のHI盃（大会委員長山室宗文氏）に是非優勝し度いと思い、試合地神戸の和田岬へ三等寝台で乗込んだ次第ですが、第一日電機の関沢さんには稍々接戦の末勝つことが出来ましたが、第二日の準決勝には東京海上の神田さんと当り後陣で打合ってもジリ貧となるし、前へ出てもしくじり良い事なしでストレート（四―六、二―六）で敗けてし

まいました。凡失が多く粘りが足らなかった様に記憶して居ます。決勝は銀行の青木、神田両氏の間で争われ青木さんが優勝されました。

次いで昭和五年は荘田達弥委員長の下で東京染井コートで行われ地所の石井さんと決勝をやりましたが、比較的簡単に私の勝ちとなりました。（六―二、六―二、六―〇）

こんなに簡単に石井さんに勝てる筈が無いのですが其の年私は全日本庭球選手権大会へ出場した為、練習量が多く良いコンディションにあったのが原因だろうと思って居ります。

次の年、即ち昭和六年は神戸和田岬コートで徳大寺則磨大会委員長の下に挙行され決勝は前年同様石井さんに当り、今度は接戦の末漸く勝つことが出来ました。（四―六、六―三、六―二、八―六）

昭和七年に優勝すれば三連勝が飾られるので非常に意気込んで居りましたが第一回戦で名古屋航空機の志村さんに当り染井第一コートでストレートで敗け、爾後HI盃は年と共に私の手の届かぬ処へ行ってしまいました。

そこで百才トーナメントなら優勝の可能性もあるだろうと思い、度々出場して居りますが、やっと一回決勝に出た丈で未だ目的を達して居りません。然し未だ望みなきにしもあらずと楽しみにして居ります。

最後に航空機会社勤務者中HI盃試合に大いに活躍し優勝した扇山正男、後藤長両氏（孰れも故人）があることを附け加えて擱筆致します。

（優勝　昭和五・六年）

HIカップの思い出

志村彦七

HIカップ戦も戦後復活して既に十ケ年を迎へる事になり、戦前にも増して盛大になって来ている事は御同慶に堪えません。私は毎年当日は欠かす事なく顔を出していますが、健康の為プレーを差控えている始末で、当日は何か心が落着かず、コートを走り廻り度い気持にかられます。（足を数年前骨折し医者からテニスを禁ぜられてしまった）偖、今は復活十周年となり記念に「三菱のテニスの歩み」を編集されらる由で、その思い出をと云う御指示に対し、私には実に数々の思い出がありますのでその一端を御披露する事に致しました。

私の三菱への入社は昭和七年四月です。その先年昭和六年の四月に病を得て、実は学生時代のテニスには既にお別れしていました。ところが入社して名古屋の工場へ赴任してから、又テニスを始める気持になり、ボツボツ練習を始めました。その動機は、十月に三菱マンのテニス大会が東京で行われる事を知って、その名古屋代表になろうとしたからだと思っています。幸い代表になって、いよいよ十月十六日及び十七日の二日間の試合に上京し、染井のコートに行きました。三菱テニスマンの勢揃いに驚きました。それは学生時代に尊敬していた諸先輩が続々つめかけて来て居られる事でした。その中で試合を始めた時何となく落着かず学生時代の試合の空気と随分違った空気を感じた事を記憶しています。

第一日目は確か雨で中止、第二日目に全部行われたと記憶してゐます。第一回戦は学生時代に何回となく試合をした牧野元さんと組みました。牧野さんの往時を知っている私は充分な警戒をしてやった事は勿論です。幸にストレートで勝てた事は、私を非常に元気づけ、第二回戦の神田さんとの試合も、神田さんの極度の不調の中にストレートで勝つ事が出来ました。神田さんは強打される方だと聞いてゐましたが、之の強打が余り爆発しなかった事が幸いした様です。

決勝戦はこれも学生時代の私の相棒だった山岸成一君でした。当時は決勝戦だけは五セットマッチで、我々社会人として兎角練習不足の者には一日に三つの試合、その一つは五セットマッチと云う事は仲々骨の折れる事でした。予期せる如く、第一セットを私が失い、第二セットを私が勝ち第三セットに入ると、私も山岸君も足にケイレンが来て、試合の進行と共に試合の内容も、何うかと思われる様になりました。結局第四セットは私が辛うじて取り優勝と云う事

になりました。この時の試合の様子を見て居られた諸先輩は、次年度より決勝戦と雖も、三セットマッチにする事にしたと聞いています。それにしても初出場で優勝とは実にいい思い出になりました。爾来私は戦争で一時中止になる迄出場し全部決勝戦をやったと記憶しています。その間優勝もありましたが、石井さんに完敗したり、後藤君に連続負けたり、中野君と雨中の決戦をやったり、或は鹿島君と何回か長い長い試合を繰り返したり、懐しい思い出は尽きるところがありません。

（優勝　昭和七・十三・十四年）

優勝の思い出

石井小一郎

全三菱のチャムピョンを決めるＨＩ盃に私が優勝したのは、もう二十五年も昔の昭和十一年秋の事でした。私事を申上げて恐縮ですが私の父はテニスを見るのが好きで私が慶応の選手として活躍して居た時代にはどこのコートへも姿を現わし、テニスコートは知ってるが学校の方は三田の何処にあるかは、とうとう知らなかった様でした。そんなわけで私が昭和三年に入社してその年のＨＩ盃の決勝で神田道朝君に三―一で負けた時は、父は大変にごきげんが悪くＨＩ盃の由来などは予て青木さんあたりから聞いて居たと見えて「三菱へはいったら岩崎さんのカップを先づ頂戴しなければ駄目じゃあないか」と如何にも残念さうに云いました。今度は新婚早々だし来年は勝ちますよなどと負け惜しみを云ったのですがその翌年から、牧野、志村山岸、後藤と云う様に新しい名手がどんどん入社して来たし、こちらは段々弱くなって昭和五年、六年と決勝に出たものの二度共牧野君に負けて愈々望みがうすくなり、まあ半ば諦めて居た様な次第でした。

処が昭和十一年の夏から父が病気で入院し年内はもつまいと云われましたので、何んとかして父を慰めるためにもＨＩ盃に優勝したいと深く心に決めてその年の開催地である神戸へ参りました。コートは神戸和田の造船所。委員長は松井小三郎さんだったと思います。

幸ひ決勝に出て志村君とやる事になりましたがそれまで志村君にはいつもやられて居りましたのに、その日はネットへ出てスマッシュがおかしい位よく決まり六―四、六―二のストレートで優勝する事が出来ました。

所謂岩崎さんのカップを病床の父が手にとって、これでお前もやっと一人前になったな、と云う様な事を言いながら喜んだ様子が今でも目に浮びます。

（優勝　昭和十一年）

ＨＩ盃の想い出

藤倉五郎

日本を遥かに離れた当地にてＨＩ盃復活十周年記念誌発刊の通知を頂き今更の様に感慨にふけって居ります。

昭和十七年、戦争の最中に三菱の一員として入社させて頂いてから、その三菱の社風に染む暇もなく出征して仕舞った私にとって、本当に三菱の如何なるものであるかを少し乍らでも知り得る事が出来たのは何と皮肉にも戦後の解体を通じて、三菱全体としての最も苦難な時代でした。

そして此の日本全体として最も先人を敬う事の薄く、過去の歴史が軽んぜられた時にいささかなりとも私なりに此の時流に押し流される事なく生きて来られたのは一重に岩崎彦弥太様を中心として固く結ばれた三菱庭球同好の先輩の方々の御指導に依るものと今更の如く感謝を新にして居る次第で御座います。

そして此等の諸先輩父同輩同好の方々とお逢いする最も良い機会を与へて呉れたのが申す迄もなく此のＨＩ盃大会でありました。

昭和廿七年復活第一回の大会に出場させて頂いて先づ驚きましたのはその規模の大きさ、参

加者の多数な事と共に、如何に多くの先輩の方々が依然として若い我々と全く同じ様にコート上でプレーされ、又その方々お互いの友情の若々しく厚いと云う事でした。

そして之がそれ迄は観念的にのみしか理解出来なかった「三菱は人の和と組織で立つ」と云う社風の一端を身を以って感じた最初でありました。

私の記憶に誤りがなければ、第一回の時には未だHI盃の行方が不明にて新に製作されたもの（其後之は百才優勝盃となったと記憶して居ります）を授与されたのですが、第二回に此の栄あるHI盃を幸にも手にする事が出来、その表に刻まれて居る年月を見てHI盃が始めて岩崎様より寄贈されたのが私の誕生の年と殆んど同じなのを知り、又そこに刻れて居る諸先輩の名前を発見して今更の様にその歴史の古さに驚き又感激したのを憶えて居ります。

又試合そのものの想い出としては第一回の試合で銀行の大野氏の鋭いバックハンドに終始振り廻された事、接戦の末之も銀行の青木君がケイレンを起して倒れ乍らも何うしても試合を続けると頑張るのを先輩の方々が、同君の亡き父青木岩雄氏の名前を出して辛うじて思い止まらせた一幕、更に化成の寺岡君との二日掛りの試合等、何れも私の一生の思い出となるものです。

大会は回を重ねる毎に益々盛大となり出品をされる方々は都度コートと時間の不足に苦心を払われると云う有様で、私も何時の間にかHI盃試合出場者の中では年長の部に入る様になると云う次第でした。

然し乍ら此の大会を通じ、又之を機会として、之なくしては到底出来ぬ程多数の先輩、同輩、後輩の人々の知己を得、日本中何れの土地に参っても常に之等の方々にお逢し又テニスを楽しむ事が出来ました。

一方社会全般の風潮としても戦後の荒廃した人々の気持をスポーツを通じて立直らせ様との事で各社とも社員厚生設備に力を注いだ結果、テニス界に於てもその人々の殆んど大部分は各会社の社内クラブを基盤として発展して来たのでありますが、その中に於て此のHI盃大会はその規模、内容、歴史から云って全く他に隔絶したもので、その一員として毎年之に参加出来たと云う事は私にとって此の上ない幸せであります。

今斯うして海外の勤務を致して居りまして、何よりの喜びは内地から来られる同好の方々にお逢ひする事であり共に其の時々の大会の模様、内地の方々のお噂を致す事であります。

何れ何時の日にか又内地に帰任致しました際、大会に参加させて頂き皆様にお目に掛る事を楽しみにして居ります。

十月三日　紐育にて

（優勝　昭和二十七年～二十二年）

幸運

寺岡健吾

伝統の大会HIカップ戦には、昭和三十年の復活第四回大会に初めて参加させていただきました。爾来、年々大会を通し諸先輩から御指導願って居りますことを深く感謝致して居ります。

三十三年の秋、大阪伊丹のコートで開催されました復活第七回大会は、私には全く幸運な大会でありました。対戦者はかって初出場の緒戦で、安定した巧みなストロークに立塞がれて自滅を余儀なくされました杉山さん（電機）や、前年力強いサービスとリーチの広いネットプレイに終始圧倒されました西郷さん（金商）でした。その他出場者には何時も社内大会で苦杯を喫しています芥川さん（樹脂）や立派なテニスの青木さん（銀行）等の強豪揃いで過去の戦績からみても全く勝運に恵まれたと云うほかはありません。その上復活第一回大会以来六連勝されていた藤倉さんはこの年、アメリカ駐在のために出場されなくなりました。自然美を満えたリズミカルなテニスが観れるのが大会の大きな楽しみでありました。この点残念に思っていましたが、藤倉さんの御不在がかえって思いも及

ばなかった幸運を与えていただく結果となった次第であります。

其後三年が過ぎ昨年は復活十周年大会が行われました。この間石黒さんを始め立派な新鋭を迎え大会が年々充実して行く姿は誠に頼もしく、これからも栄ある大会を目指して何時迄も練習を続けて行きたいと思って居ります。

（優勝　昭和三十三年）

感　想

石黒　修

第十回全三菱HIカップ争奪戦は十一月の冷い雨が降ったり止んだりの空模様の下で行われた。

武蔵野の面影をとどめている当三菱銀行のグランドは環境の良さもさることながら設備が整っている点も我々プレーヤーとしては大変試合がやりよかった。それにもまして感じたことは学生時代常々HIカップ戦の話は聞いていたがこれ程大したものだとは思わず社会人となって参加してみて初めてその規模の大きさに驚いた

当日は全国から予選を経て選ばれた八人の代表の間で行われたが、準決勝まではともかく名古屋代表の半那君との決勝戦は気温が低く、しかもコートが苦手のクレーコートであったので非常に苦しかった。それに彼は日頃の練習相手でありパートナーである為、お互いに得手不得手を良く知りつくしているのでなかなか自分の思う様にはいかなかった。それにしてもこの日の半那君の調子はすばらしく、あいつぐ好ショットについにマッチポイントをつかまれるというピンチにおちいった。しかし午前中に行われた準決勝で化成の生川君と長時間の接戦をした彼は極度の疲労の為この場に到って足にケイレンを起した。これは致命的であった。私は辛じて勝を拾ったのである。

勝った瞬間はああ危なかったとしか思わなかったが時が経つにつれて本当に勝って良かった、よしこれからも頑張って藤倉先輩の六連勝を必ず破って見せるぞとかたく心に誓ったのである。

当大会は全国の三菱系の名士の方々も多数見に来られて大きな試合には慣れているはずの私もさすがに緊張していたのを覚えている。しかしこの様な大会を通じてそういう方々とわずかな間とはいえ時を過せたという事は私にとっても大変光栄であった。又同じ三菱系の会社に働く若い人達ともテニスという一つのスポーツを通して親しくなる事は社会的に見ても非常に良い事だと思う。

次のような方々も又強いプレーヤが新しく加わるであろうし本大会がますます盛んになる事を期待してやまない。

（優勝　昭和三十四～三十六年）

（百才・百五才優勝者）

HIカップ　百才トーナメント

山岸　成一

戦後HIカップが復活して十年になり其の記念誌を発行する事になり其の間に何かに優勝した者は何か書く事になったと銀行の浅田委員からの連絡を受けた。そう云われて見ればもうそんなになったかと思う十年前に第一回の百才トーナメントに彦弥太さんと組んで優勝した次第です。之の百才トーナメントの条件も今は各五十才以上で合計百五才以上と云う事になっていますが、その当時は数へ年四十五才以上合計百才以上と云う事でしたので私も資格があった訳です。誰が仲人をして下さったのかすっかり忘れてしまって甚だ申し訳ない次第ですが、或いは地所の石井さんかとも思います。何れにしても彦弥太さんとは合せてぴったり百才の相年だった訳で其のせいもあって美事に優勝を獲得し得た事と思います。

戦前になかったこんなトーナメントを誰が発案したのか知りませんが、おそらく且て活躍した昔の有力メンバーも年には勝てずHIカップ

のシングルスは勿論の事、東西対抗のダブルスにも参加出来にくくなり、折角の催物に何も参加出来るものがないのでは余りに淋しいので考え出した名案かと思っています。その名案のおかげで之の第一回のみならずその後一昨年（昭和三十五年）三菱レイノルズの鈴木さんと組んで再び優勝を楽しませて頂きました。

第一回の時の忘れられない思い出は富田・河尻組との決勝戦。彦弥太さんも大変な意気込みで戦前からのとって置きのゴールドスターにアーマーのラム・ガットと云う最高の道具だて。この道具には私の学生時代のトーナメントのセミファイナルあたりで屢々ぶつかり、なやまされた事があったのですが之の日は余りに久し振りだったせいか却って悪かった。道具が良すぎてボールが飛びすぎアウトの連続。夕やみはせまって来るし勝負は仲々つかぬし、乗馬の名手に脚を締められて自称名馬も汗だくになってしまいました。

（優勝　昭和二十七・三十五年）

HI百才トーナメント優勝の想い出

住友　茂
池上　保

昭和二十八年十月十一日、神戸和田岬のコートで復活第二回HI百才トーナメントに優勝してから既に八年、月日の流れの早さに唯驚くばかりです。当日私共は第一回戦は不戦勝で二回戦は森野・片岡組に当り、全然練習して居なかったので三回もマッチポイントに追込まれ乍ら八―七で勝をひろって幸運のスタートを切りました。

三回戦は高宮・久保組でしたが、其の鉄砲玉の様な高宮さんのフォアハンドを何とか逃げ延びて八―四で切り抜けました。準決勝は有名な野村・大淵組で到底勝目はありませんでしたが、当方は今迄の苦戦で少し当りを取戻し昔のテニスの感が甦って来たのに対し、先輩組は激戦四回目で少し疲れが見え始めて居りました。幸運な事に、ダブルスでは苦手の大淵さんのサービスも四回に一回しかありませんので、悩まされ乍も住友が良くつないで八―六で私共が此世に生をうけてはじめて先輩組に勝つ事が出来ました。優勝戦には熊谷・富田組、住吉・関沢組、牧野・柴田組等の群雄むらがるゾーンを楽勝して進んで来た石井・高萩組でした。優勝戦迄出た事に満足してもう充分と軽い気持で決勝戦に臨みました。いざ開始となると既にこの当時より高萩さんはあの有名な「優勝の挨拶状」なる秘密文書を懐中深く準備されて居たのか少し固くて今迄の様な快プレーは少くなって居ました。其処で石井さんのバックを極力警戒し乍ら住友がロブでつないで居る間に、昔からシングルばかりやって居てヴォレイの出来ない池上が前についてネット際で横に走廻って大いに稼ぎ始めました。前代未聞の意表をついた策戦で見物の皆さんも意外な面持で見守る内に、短いゲームは八―二で私達の勝利となって居ました。夕闇迫る頃戴いたHIカップの栄光は幸運の感激と共に今も尚まざまざと甦って参ります。

最近住友は還暦を過ぎる頃より健康に恵まれず二ケ年ばかり静養を続け只管テニスへの復帰を念願して居ります。

池上も体力の衰を如何共出来ず専らゴルフに精進し、一時は倶楽部選手権とシングルとやらももらいましたが今ではハンディ10で静かにゴルフを楽しんで居ります。然し、HI大会とあれば佐野常世の再来の如く両人共衰へたりと云え共やせ馬に鞭うって大江戸にまかり出る心算、唯ボールが無事にネットを越す事のみを乞い願って居ります。今後、岩崎様始めHI大会関係の皆様の御健康を祈念し、本大会が益々隆盛になる様祈念して想出を終ります。

（優勝　昭和二十八年）

百五才トーナメントに優勝して

河尻　慎

私は昭和二年に三菱商事に入社したのでありますからHIカップを知ってから既に三十数年

になります。

三菱の庭球同好者の一人として途中外地勤務や戦争で多少は抜けましたが、こんなに長い年月HIカップの盛儀に参加し親しく岩崎彦弥太様始め多くの大先輩の謦咳に接し三菱各層を網羅しての庭球同好人の多くと交りを深くし得ました事は、身に余る光栄に存じますと共に三菱生活の最も感慨深い想出として終生忘れる事の出来ない所であります。

HIカップ復活十周年に当たり表記の百五才トーナメントに優勝してと題して何か記せとの命令でありますので、自分の事等一～二を記して責をふさがせて戴きます。

私は戦後HIカップ試合が復活してからその附録とも申す可きこの百五才トーナメントには毎年欠かさず参加して居ます。第一回も第二回も三菱金属鉱業の大先輩である富田治禧さんと組んでこの試合に出場したのであります。第一回は優勝戦で岩崎彦弥太・山岸成一組に敗れましたが、第二回はワンセットオールの七―五かで苦しいゲームのやり取りの末漸やく熊谷一弥・長沢（現三菱化成研究所長）組を破り優勝を遂げたのであります。

その当時は未だ百才トーナメントでありましたが、其の時の私の組二人の年齢合計は百才を遥かに越え百十六～七であったと記憶して居ます。それも今日の百五才トーナメントのワンセット試合と異なり三セット試合でありましたので、勝ち抜く迄の連続五～六試合は御老体同志にとっては大変御苦労な事でありました。少しオーバーな言い方ですが、世話役や救護班の方々にして見ますと御老体に重大な痛み分けでも起らなければよいがなあと心配をした場面もあった事と思います。

あのカップには毎年の優勝組各人の生年月日や年齢は刻まれてはいませんが、この私達二人の合計優勝年齢は其の後十年近くたった今日もなお他の優勝組によって破られていないと言う事実を自負し、時折りは昔の語り草として富田さんと共に歓びを分っているものであります。私は其の後いつでありましたか其の当時の歓びを想い出し、HIカップの試合のあとの懇親会の席で皆様方を前にして私達の優勝年齢を誇らしげに披露し、骨董的存在等と笑うなかれ、税務署の定義によれば骨董とは年をとればとる程価値を増して行くものであります等と酔余の一席をぶったのであります。真に年齢はとり度いものと言い度い所です。

多くの先輩の前に私は未だ齢を語る資格は御座いませんが、もう青壮年と申すには大分距離が出来ました。せめて老壮と云った様な所でこれからは百五才トーナメント専門に仲間入りをさせて戴いて、骨董ならぬがらくたテニスを続けて行き度いと念願するものであります。皆様の前に本当に御笑いを供する事で御座いましょう為、何卒御見捨ちなく永く御附合いを御願いする次第であります。

HIカップ戦が年々歳々その盛大さを加えつつあると共に、この百五才トーナメントも参加者の齢に似ず益々意気盛んに行われている事を慶ぶものでこの先一層の繁栄を祈るもので御座います。

思い出

復活準備時代の一～二年

一、私は戦前の三菱がその大きな組織と力を動員して行い盛観を誇った昔のHIカップ戦よりも、敗戦と解体によって言はば一家離散した様な状態の中から生れた戦後の復活HIカップ戦の方に一層意義深いものを感じ一層親しみを覚え、以って今日の盛大を慶ぶものであります。

話しは戦後の復活準備時代の一～二年の事にさかのぼりますが、昭和二十三年でありましたか二十四年でありましたか夏も終りに近く立秋も過ぎた残暑なおきびしい頃の事でした。

三菱庭球同好会の大先輩達が誰れ企画すると云う事もなく、お互胸にHIカップ戦の復活を期して由縁の地巣鴨の染井に集りテニスを共にしたのであります。当日馳せ参じた者各地から約三十名、その中には何年かの戦争と其の後を過して安否のはっきり判らなかった同志で此の時に初めて会い、無事を悦び合った人もあったでありましょう。戦後の荒廃でそれこそ食べる物も未だ不自由な時代でとてもテニス所ではなかった頃でありましたが、誰もがテニス愛好の

執念から戦争中戦後と長い窮乏の中にあっても何んとかこれ丈はと守り続けて来た古いラケット古シャツに古靴と言った出で立ちで、御当人は何れも張り切ってはいますが何も知らない他人が見たら其の顔触れと申し姿と言い生きの悪い古物ショーと申した所であっただろうと思われます。

バケツに浮かべた西瓜をかぢりながら共に歓びを分ち合っている姿が写真に残っていますが、これが戦後岩崎彦弥太さんを御招きしての初会合の情景でありました。あの時誰が今日の隆盛を予想し得たでありましょうか。当時を想へば真に感慨深いものが御座います。

それでも当日のテニスには進駐米軍の使うもののおこぼれ頂戴と言う様な事で少しは新しいボールも使へたし、テニスが終っての席（染井のクラブ）には当時貴重な闇ビール等も顔を出し、彦弥太さんを囲んでの久々の会合で心豊かに大いにメートルが上がったのであります。

其のメートルの上がった所で

「次回をやろう。今度は西でやろう。西の陣は引受けた。今度三菱電機の伊丹でクラブハウスが建つから百人や二百人は引受けた」

と其の席に居られた間　四郎さん（三菱電機長老）の名台詞が出たのであります。当時の状態は前述の様な諸事まだまだ乏しく不自由な時代でありましたので、酔余の大ボラに近い話と聞きましたが、実は之れが本物の原動力となって間もなく西の陣が実現したのであります。

HIカップ戦復活の準備態勢はこの西の陣で八分通り基礎づけられたものと言えるでありましょう。記念す可き其の時の間（ハザマ）発言を想い出し有難き事なりしと感謝の念を新たにするものであります。

二、私は当時大阪に勤務しておりましたが、関係者の一人として之れは容易ならぬ事だと思い早速その話を持って帰り三菱電機伊丹の各位に諮る事に致しました。真に幸いな事に伊丹にはHIカップの最も古い馴染の深い関係者が沢山居られて、此等の方々が早速世話人の顔触れを揃え、多くの関係会社への呼び掛けを行い頻繁に打合会を開催し、施設の設営提供其の他実行の細部に亘る幾多の事が有形無形の奉仕の下に行われましたので、着々と事が運ばれ岩崎さんを御招きしての第二回の準備大会が伊丹で催されたのであります。（昭和二十五年？）

当時三菱電機伊丹には後藤精一、池上、住友等の各位が居られそれに平野（元重工）さん等何れも昔からのHIカップの世話方が集り並々ならぬ御世話を願ったもので、私等も当時関係者の一人として甘える侭に多大の無理難題を持ち掛け御心配をかけた事を深く御詫びするものであります。

斯くして西の陣は三菱関係長老の参会する方々の多きを加え一躍三百人もの集りとなりました。分散された三菱関係各社の理解と協力ムードは此の時に略々出来上った様に思われます。

三、更に続いて第三回目の準備大会は遠く九州黒崎の三菱化成コートで行われました。当時黒崎には柴田（現三菱化成社長）さんが工場長として居られ、又多くのテニス選手が居られて諸事万端非常な御世話を願って是亦集まる者三百人に及び盛会を極めました。

四、第四回目は名古屋で開かれ三菱電機コートで行われました。当時三菱電機名古屋には是亦HIカップには古い御縁のある小倉弘毅さんが居られ多大の御世話を願い、亦電機の長老間さん外多数大先輩の御出席を賜わり大盛会でありました。

五、九州、名古屋共親しく岩崎さんの御出ましを願って行われました事は勿論でありますが、之れで全国に亘っての下準備成ったという事になったのであります。

六、戦後のHIカップは斯の様にして生まれたもので、戦前の岩崎盃とは異った光りを以って身近かな庶民的なものとして三菱各層の老若男女に親しまれ今日の隆盛を見るに到りました事は、真に慶ばしき限りで今後益々盛んならん事を祈るものであります。

（優勝　昭和二十九年）

ＨＩ盃とＤ盃

服部譲次

学生時代は野球や陸上競技をやり、テニスは三菱航空機へ入社後可成り経って中年から始めた私は、歳では超ベテランであるが球歴では新人に近く、文字通り下手の横好きに過ぎないから、皆さんに聴いて貰う程の戦績もテニスに関する意見めいたものもない。然し今この老年に及んでも健康でテニスを楽しみ、又静かにテニスを中心とする昔の記憶を繙いて、多くの親切だった球友の友情や自分の下手なテニスが如何に屢々球友を困惑させたかを回顧しては感謝の念を新たにし、楽しい想い出を懐しむ事は真に心暖まる幸である。

私が三菱航空機の名古屋工場に勤務して居た若い頃、当時我国の一流選手だった牧野君、志村君、後藤君等が相ついで着任された。私に直接テニスを勧めて教へて呉れたのはこれらの人達だが、当時同工場には今は故人となられた石沢君、扇山君等我国テニス界の先輩も在勤して居たので、私のテニスへの入門は大いに恵まれて居た。石沢君はフランス出張から帰る時、球を打出す機械（野球のピッチングマシンの様なもの）を買って帰って私にも其機械で基礎を会得せよ、又板打ちを大いにやれとコーチされた。現在選手自らガットを張る事はないと思うが、その頃はよく自分で張った。石沢君は琴に弦を架ける時の道具をヒントに色々ガット張りの小道具を考案して居た。その頃ＨＩ盃や東西対抗が名古屋で行われた事があり、職員寮のコートも使用せられたので私も準備委員に加ってローラーを牽いたり、服部は製図で線を引く事は本職だからコートラインを引けと言われ石灰まみれになって仲々真直に引けないで困った事を憶えて居る。

支那事変から戦争と、テニスも出来難い状況になって、彼是十五年程もテニスから遠ざかって居たが、二十八年に生れて始めての入院をして胆嚢切除の手術を受けた。幸いその後非常に健康になったが、もういい歳で下手なテニスでもあるまいと思い散歩を運動にして居た処、又志村君に強く勧められ、同君に組んで貰って二十九年名古屋の時に始めて百五才に出て、それ以来毎年出場させて貰って居るが、三十一年の大阪の時、故人となられた西君と出てどう間違ったか優勝した。その年は芦屋の全国グランド・ベテラン大会第一回があり、戦前ＨＩ盃で活躍せられた平野君と組んで出て、これにも優勝して間違が重った年だった。間違は勿論私の方で私のブレーキが意外に少かったという事である。間違はもうそれ切りで、年毎の百五才に神田君、三宅君、中島君という立派なパートナーを得たのに私のブレーキで優勝圏には近づけなかった。

テニスを愛好して居る人にとって最も大きな関心の一つは恐らく毎年日本も参加するＤ盃国際試合であろう。日本はテニスでは決して後進国ではない。多くの世界的名手が過去にも日本から出て居るけれども、Ｄ盃予選の国際試合近年の我戦績は必ずしも良くないので庭球界の在り方や組織とか強化対策とかに就いて多くの権威者により研究されて居る様である。私にはよく解らないが、唯前々から何となくＨＩ盃とＤ盃とは無関係ではないという気持がしてならない。と言うのは、直接的にはＤ盃を日本に齎す中心戦力はＨＩ盃に最も関係深い選手であろう事、関接的には同系企業体を「ホリゾンタルインテグレーション」（大先輩間四郎様箴言から）したＨＩ盃中心の全三菱庭球同好会は漸次他の企業系列体にテニス愛好者にも範として採られる様だからこの様な健全強固な厚い層を持った組織が多くなれば、これらを基盤としても立派な名手が出て呉れるであろう事を感ずるのである。ＨＩ盃がＤ盃を我国へ持って来ると近頃益々信ずる様になった。

（優勝　昭和三十一年）

運・根・鈍（わがテニス人生）

高萩秀雄

彼は生来あまり器用な方ではない。いうなれば鈍の一語につきる。その彼がテニスを始めたのは一橋在学時代で、それまではラケットを持ったこともない全くのずぶしろであったが、これがやみ付きとなってテニスに明け暮れの学生々活を送った。それも一向に上達もせず平々凡々であったが、その頃習いはじめた尺八と共に五十余年変りない愛着を持ちつづけ、彼の生涯もこれを中心に転回して来た。大正八年三菱（鉱業）に入ったのもテニスの交友関係からであった。

大正末期から昭和にかけての三菱にはデビスカップ選手や全日本の覇者、強豪大学の名選手などが次々に入って来て正に社会人テニス王国の壮観を呈していた。その三菱チームに末席ながら仲間に入れて貰って一流選手を球友に持ったことは彼の大きな倖せであった。

戦前のHIカップ庭球戦は大正十二年の第一回から十七年の第二十回まで続いた。彼はこの二十回のうち第二回と第三回に九州予選を経て出場している。しかし何れも一回戦で敗退している。それもその筈で、地方にいた頃であるからこそ出られたようなものの中央にいたら到底出られたものではなかった。ただ第二回に出たとき、彼は当時慶応を卒えたばかりの故青木岩雄君と当って八—六・七—五のロングゲームで敗退したことを今でも忘れないでいる。

復活第一回の昭和二十七年には百才トーナメントも併せて行われることになり、当時すでに五十八才になっていた彼も金属の松木君と組んで出て準決勝で富田・河尻組に破れた。第二回（神戸）では地所の石井さんと組んだというよりはおんぶされて出たが、決勝戦で住友・池上組に負けて優勝を逸した。それから五年のあいだ年毎に石井・高萩組で出たのであるが通算して決勝戦二回、準決勝戦二回、三回戦一回、棄権一回という戦績で敗退している。そして三十三年の第七回（伊丹）に運よく決勝戦に残り、柴田・河尻組に六—三で勝って積年の宿願を達したのであった。石井さんに組んで貰って六年目にやっと栄あるカップを手にすることができたわけでまことに根のよい物語りではあるが、それだけに彼にとっては終生忘れ得ぬよき思い出となった。これというのも石井さんの温かい友情がここまで引っ張って呉れたおかげである。

この第七回の委員長は奇しくも彼出身の鉱業の伊藤保次郎社長であった。当夜はキリンビール工場内の会場で恒例の懇親会が盛大に行われたのであるが、伊藤委員長の挨拶の中に織り込まれた氏一流のユーモアに満ちたスピーチは満場を湧かし、宴席の雰囲気を大いに和らげるものであった。そのスピーチというのは「この会場には、来る年も来る年も百才に優勝の夢をいだきつつ、本願を達したときの挨拶の原稿を書きつづけてふところにしては来るが、遂ぞ日の目を見ずに空しく六年という歳月が流れた。しかし、本日とうとう宿望を達して用意の原稿を役立たせることとなった」というのがそのあらましであった。彼にいよいよ晴れの番が廻って来たとき彼はこの原稿云々について一応釈明しようかと思ったが、いみじくも戯曲化された伝説をそのまま甘受しつつ挨拶と感謝の言葉を述べ終ったのである。

本年すでに六十七才を超えた彼は越し方をふり返り、鈍は鈍なりに根気よくやったことと石井さんという名パートナーを得た好運を、こよなき思い出としてこれからも終生持ち続けることであろう。

（優勝　昭和三十三年）

私の願望

鈴木　厚

私は左脚の静脈炎を患って静養中の昭和三十年を除いては、戦後復活のHI盃百歳トーナメントに毎回出場している。

昨年の第九回大会では、勿論パートナー山岸成一氏の活躍に負うところが多かったのではあ

るが、私自身も試合前の練習の機会に恵まれて、比較的体調が良かったので、僥倖にも優勝の光栄を荷い宿望を達することが出来た。

私がテニスを始めたのは小学五年生の折で、その頃は勿論軟球であるが、その小学校にはコートが五面もあって、田舎には珍しいテニスの旺んな学校であった。然し中学に入ってからは柔道を始め、学校の選手になったりしたのでその方が主になってしまった。

昭和二年、三菱鉱業に入社し九州の筑豊礦業所に赴任してみると、テニスが旺んで当時の礦業所幹部の蒔田三雄、森本政吉、七瀬善吉、藤岡万五郎、高木作太諸氏も御館山コートの熱心な常連であり、高萩秀雄氏がNO・1のプレーヤーであった。

ここで初めて硬球の面白味を知り、熊谷さんの「テニス」と言う本を読んでは、ボールド打ちでイースタングリップに変えることを練習したものである。

HI盃九州地区予選が御館山コートで行われ、決勝戦で熱戦の末敗れた高萩さんが、コートの一隅で秘かに涙を流していたのを、未だに強く印象に残してゐるが、之も昭和二・三年頃のことではなかったであろうか。

その後転任先の都合や、戦時中の生活環境で多少の起伏はあったが、機会があればラケットを握っていた。

終戦後は東京での生活が多くなったので、戦前にも増してテニスを楽しむことが出来る様になった。

技倆の進歩は最早望むべくもないが、せめて富田長老の年齢までテニスを続けることが出来たら、と言うのが現在の私の願いである。

（優勝　昭和三十五年）